九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

徒然草「鼻のほどおこめきて」考 : 続オゴメク幻想

白石, 良夫
文部科学省主任教科書調査官

https://doi.org/10.15017/15077

出版情報：語文研究. 105, pp.54-69, 2008-05-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

徒然草「鼻のほどおこめきて」考

――続オゴメク幻想――

白石良夫

かつあらはるゝをも顧みず、口に任せて言ひ散らすは、やがて、浮きたることと聞ゆ。また、我もまことしからずは思ひながら、人の言ひしまゝに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人の虚言にはあらず。げに〳〵しく所々うちおぼめき、よく知らぬよしして、さりながら、つま〴〵合はせて語る虚言は、恐しき事なり。

〔現代語訳〕言っているはたから嘘だとばれるのもかまわず、でまかせにしゃべり散らすのは、根も葉もないことだとすぐにわかる。また、自分でも信じていないくせに、人の言ったとおりに、鼻のあたりをうごめかせて語るのは、その人の作った嘘ではない。いかにももっともらしく、ところどころを曖昧にして、よくは知らないふりをして、それでも辻褄をあわせて語る嘘は、恐ろしいことである。

一　議論は文献学上の問題となる

徒然草第七三段、世の中の嘘偽りというものについて語ったところの一節である。右の本文は、定評ある西尾実校訂の最新版（岩波文庫、新訂版は安良岡康作と共著）を借りた。西尾校訂本は、戦前から一貫して、その底本に慶長一八年古活字版を使用する。本稿で問題とする箇所の底本の正確な表記は「鼻のほどおこめきて」であり、西尾は濁点を補ってそれを「鼻のほどおごめきて」と校訂した。

徒然草のこの部分は、河内本の源氏物語帚木巻をふまえた

表現である。このことは徒然草注釈史の劈頭『徒然草寿命院抄』（慶長九年刊）以来ずっと指摘されてきており、源氏の本文研究がすすんだ昭和以後は、作者兼好法師の座右にあった源氏物語が河内本系本文であったことの証拠として、よくひきあいに出されてもきた。

わたしは、河内本帚木巻の「をこめきて」について、前々稿（本誌一〇二号）・前稿（同一〇四号）においてくりかえし、これが従来いわれているオゴメクではなく、オコメクであったこと、そして「オゴメク」なることばは中世以前に実在しなかった、近世の源氏学者の作った架空の古典語であった、ということを考証した。そして、そうであるとするならば、右に引用した徒然草本文「鼻のほどおごめきて」は、間違いということになる。このことは、前々稿ではそれとなく匂わせた（つもりであった）。前稿では、「おごめきて」であるはずがない、と明言した。

繰り返す。わたしが得た国語史の知見がおしえるのは、中古・中世にオゴメクなることばはなかったということである。近世から近代にかけてオゴメクと認識された古語は、じつはオコメクであった。徒然草の問題箇所も当然、「オコ（烏滸）メク」である。

したがって、本稿で議論すべきは、河内本源氏も徒然草も、オコメクということばが忘れられて、どういう経緯でそれが「お（を）ごめきて」と校訂されるに至ったのかという、純粋に文献学上の問題でなければならない。

二　古語の清濁とその校訂
――ただし当該の問題は次元が異なる

いうまでもないことだが、中世から近世初頭にかけて、古典文学作品の書写に濁音符の使用はないのが普通である。江戸時代初期の刊本も同様。やがて、写本でも版本でも、一部で濁点の使用が始まる。だが、この時代の文学作品のテキストの清濁表記は厳密でないというのが、専門家のもつ経験則である。今日一般に、中世以前の文学作品の翻刻校訂には、この無濁点時代あるいは濁点使用揺籃期の写本・刊本が底本として使われる。だから、無濁点のテキストは勿論、濁点使用のテキストを底本につかう場合においても、濁音であるべきものには濁点を補う、これが国文学の慣習である。濁点をおぎなうことに、われわれはほとんど違和感をいだかない。ただ、古い活字校訂本では、江戸期の写本・版本と同様、その濁点のうちかたが総じて杜撰であった、というのが言い過ぎなら、いたっておおらかであった。

濁点をおぎなうというこの行為を、よく、通読の便に配慮してといった読者サービスのごとくに考える研究者がいる。だが、それはまったくもって心得違いであろう。おおらかな翻刻でゆるされた時代はともかくとして、今日の国文学の校訂作業では、濁点をうつかうたないかは、すぐれて学問的な判断を迫られるからである。原本忠実主義を標榜するのは、判断することに臆病であるにすぎない。もちろん、そうでなければならない資料や局面もあることを否定はしないけれど。

濁音かそうでないかの判断は、国語史に関する知見による。であるから、その知見に変更が生じれば、それにともなって、濁点を付すか付さないかの規準も揺れてくる。たとえば、現代語で「ソソグ（注ぐ）」ということばは、かつては、古語でもソソグだと考えられていたから、ためらうことなく「そそぐ」と校訂された。だが、亀井孝によって、江戸時代初期以前はソソクだったということが明らかにされた（『国語と国文学』二四巻七号「ソソク＞ソソグ」、昭和二二年七月）。亀井の説はまず国語学の世界で認められる。やがてそれが古典本文校訂に生かされる。今日では、だから、近世初期以前成立の作品の本文は、これを「そそく」とするのが学問的な校訂ということになる。それでも「そそぐ」とする場合は、規準上の固有の論理（たとえば、清濁はいっさい現代語音に従う、といったような）を用意しなければならない。ソソグ・ソソクにかぎらず、昨今、古語の清濁に関しては、研究者のあいだで、厳密であるべしという傾向にあり、今後もこの種の問題の複雑化は予想される。

それはともかく、右の伝でゆけば、冒頭引用の徒然草の校訂本文「鼻のほどおごめきて」は、オゴメク（蠢く）という古語の存在が自明であるという前提にたっている。そして、その前提になる知見を、わたしは否定した。徒然草成立の時代に「オゴメク」という語は存在しなかった、と言った。わたしの説が学問的に認められるならば、今後、当該箇所は、「鼻のほどをこめきて」と翻刻されねばならない。ソソグ・ソソクの場合は同一の言葉の発音の変化にすぎないが、オゴメク・オコメクは、まったく別語であり、しかも一方は実在が疑われているのだから、なおさらである。規準上の論理も、ここでは適用されない。

三　「おこめきて」も捨てたものではない

国語史の知見がオゴメクの存在を疑わなかったこれまで、この問題にもっとも深入りした徒然草注釈書は、田辺爵の『徒然草諸注集成』（昭和三七年刊）である。しかしながら、

「結論をいえば語義不明である」と始めから結論を放棄しておこなう語義考証は、はなはだしい混乱を来たしている。

徒然草本文とは関係のない源氏青表紙本のオコヅク・オコツクまでを本格的な検討の対象にした考証自体、その時点において議論の核心からはるかに遠ざかってしまっている。『玉の小櫛』や『花鳥余情』もひきあいにだされてはいるが、そのためなのか、徒然草語彙の考証であるはずなのに、源氏物語のそれをやっているではないかと思わせられて、紛らわしいことこのうえない。また「を・お」の表記についても、仮名遣に関する認識が不十分であるため、定家仮名遣・契沖仮名遣・歴史的仮名遣の混同が見られるようであり、読むものをいたずらに混乱させる。読者を混乱させるだけでなく、著者自身も混乱して着陸不能の結論で終わっている、とわたしは見る。したがって、本文を「おこめきて」と処理して通説に異をとなえているかに見えながら、だが、その明確な根拠は出しえていない。校訂本文「おこめきて」が考証とどのように繋がっているのか、理解しかねる。考証の収拾がつかなくなり、それをふまえた判断はあきらめて、とりあえず底本（烏丸本）のままにした、としか思えない。せっかく紙幅をついやしながら、考証が徒労に終わっている。

新日本古典文学大系（久保田淳校注）は、これまであまり使われなかった正徹本（後述）を底本にしたところが新しい。本文を「おこめきて」とするところも、従来の徒然本文と異なっている。ただし、語釈の「小鼻のあたりを動かして言う嘘は」は従前の口語訳となんら変わるところなく、引用する源氏本文についての解釈も、わたしのそれとは一致しないようである。この最新の徒然草注釈にも、「おこめきて」とする校訂本文の明確な根拠は見えてこない。

だが、はっきりした根拠をもって「おこめきて」の可能性を考えた研究者、言い換えれば、濁点をおぎなう慣習を持ち込んでくることに抵抗感をもった研究者が、皆無だったわけではない。たとえば、三木紀人は講談社学術文庫『徒然草全訳注』で、本文は「おごめきて」と処理しながら、「おこめきて」も捨てがたい旨の注釈を付している。底本の慶長一八年古活字版の「こ」に濁点がほどこされていないというのが、その理由であった。すこぶる単純でわかりやすいこの理由は、しかし、濁点は補うものだという国文学の本文校訂の慣習・常識を知らないゆえの躊躇ではない。

慶長一八年刊古活字本は、烏丸光広の奥書もいっしょに組版した、いわゆる「烏丸本」と通称されるもの。信頼するに足る本文として、江戸期には整版本や注釈書の底本につかわれ、また近代になっても、ひとり西尾に限らず、これをつかっ

て活字化するのが、徒然草本文研究の主流であった。昭和初期、最古の写本と目される正徹書写本（静嘉堂文庫蔵、永享三年〈一四三一〉の年記あり）が学界に紹介され、その後も室町期書写の注目すべき古写本が出現したが、烏丸本の評価はそれによって下がることはなかった。これはひとえに、光広の奥書がこの活字本の権威を保証していたからである。

光広奥書の内容については、種々の解説書にふれられていることでもあるし、とくに安良岡康作『徒然草全注釈』（角川書店刊）には注釈解説もそなわっているので、詳細はそれらにゆずり、ここではかいつまんで述べると、

――三宅亡羊なる儒者が徒然草を上梓するため写本をもたらし、それに句読・清濁を質した。光広はそれに応じ、ついでに本文の校訂にも手をだした。

つまり、該書は、古今伝授をうけた近世初期の代表的文人の校訂になる本文であった。とくに句読・清濁については、亡羊から質問されたところでもあるので、慎重を期したと考えられる。烏丸本徒然草は、近世初期以前のほかの古典古写本や刊本とちがって濁音表記がなされており、その清濁の区別はかなり精確、というのが専門家のあいだでの常識である。だから、「鼻のほどおこめきていふ」は、最終的に通説「おごめきて」にあわせるにしても、烏丸本徒然草の性格を知っている研究者ならば、三木のように、たちどまって清濁の問題を一考しなければならないものであった。

三木は、一度は疑ってかかり、それでもなお通説にあわせた。それは、さしも慎重な光広もこの箇所は濁点を打ち忘れたのであろう、という判断である。

だが、はたして、そうであろうか。

四　光広に清濁の迷いはなかった

たしかに、光広がいかに慎重であったとしても、人間のすることであるから、間違いは避けられない。清音であるべきなのに濁点が付される、また濁音であるべきなのに濁点が付されない、といったことが絶対ないとは保証できない。いや、あるのが普通であって、光広とて、例外ではなかった。時枝誠記編『徒然草総索引』によれば、つぎの六箇所、文脈上あきらかに清音であるはずの箇所に濁点がある（傍線白石）。

酒宴ことさめて、いかゞはせんどまどひけり。（第五三段）

寸陰おしむ人なし。これよくしれるがをろかなるか。（第一〇八段）

一には物くるゝ友、二にはくすし、三にば智恵ある友。（第一一七段）

万の遊にも、勝負をこのむ人は勝て興あらんため也。をのれが芸のまざりたる事をよろこぶ。　（第一三〇段）

夜に入て物のばへなしといふ、いと口おし。（第一九一段）

夜なればことやうなりとも、なべたる直垂、うち〳〵のまゝにてまかりたりしに、　（第二一五段）

人間の避けられない間違いは、これだけではない。右の例は、濁点の付されてあるものについて、文脈から慎重に判断したものである。ほかに存疑のもの、文脈による判断のできないものは、除かれてある。それら除かれたものが間違って付されたものでないとは、もちろん確言できない。

さらに、われわれは濁点の付されていないものについても、懐疑をさしはさまなければならない。それが濁点の不注意な欠落であるのか、そうでないのか、はっきりしないことがおおい。単純なものなら、第九九段の、

たやすくあらためられがたきよし、故実の諸官等申けれは、其事やみにけり、

など、これは文脈から濁点の欠落と判断できる。それに、ほかの箇所の用例と照らして、濁点欠落とみなせるものもある。たとえば、第一三四段、

雪のかしらをいたゞきて、さかりなる人にならび、況及はざる事を望み、かなはぬ事をうれへ、来らざることを

まち、

の「及はざる」は、他がすべて「及ば」「及び」であること、またこの語にオヨフという語形が想定しにくいことから考えれば、この箇所のみ単純な濁点の付け落としと見なしていいだろう。

第七三段の「おこめきて」も、従来ずっと、この手の不注意と考えられていたのであった。オゴメクの存在を疑わなかった近代の国文学では、だから、ためらわずここに濁点を補った。

光広校訂本が間違いの少ないテキストなのか、そうでないのか。そういったことを客観的に測れる物指があるなら教えてほしいところだが、うかつに判断できないものをふくめても、わたしは、間違いのきわめて少ない、神経の行き届いた良質の本文だと思う。それは、いわゆるムと発音すべき「ふ」表記が一例の齟齬以外、厳密に書き分けられていることからも裏付けられる。

この時代の表記の習慣として、「楽しむ（み）」「眠る」「傾く」「寂し」などのマ行音節の表記にはハ行の清音仮名をつかう、という表記法がある（坂梨隆三『近世の語彙表記』）。これらの語でハ行表記をしていれば、発音はム。これは裏をかえせば、バ行表記ならば、バ行の音節をあらわしていると

いうことである。こういった例に該当する語彙で、烏丸本徒然草に複数の仮名書き出現例のある語は、「とぶらふ」（第七六段）「とふらひ」（第一〇四段）以外、表記に混乱がみられない。光広の校訂にしたがえば、「眠る」はネムルであり、「寂し」はサビシである。「訪ふ」の例は、第七六段のときはトブラウと認識し、第一〇四段のときはトムライと認識したと考えれば、認識の混同ではあっても、表記の間違いではない。いや、このころは二つの語形が並存していたと考えるのが普通だから、ある意味、認識の混同ともいえない。

そして、わたしが前々稿・前稿で縷々論じたところの、オゴメクが中古・中世に実在しなかった言葉だという国語史の知見をここに繰り込むならば、光広の校訂本文「鼻のほどおこめきて」は、濁点の不注意な欠落でないこと、明々白々となる。二条派古典学を家学とする烏丸家の当主、ということは、すこぶる保守的ということの代名詞でもある。だからといって、光広は保守主義者の確信をもって濁点をうたなかった、わけでもない。なぜなら、これは確信をもつまでもなく、清音であることが自明の言葉なのだから。近代の国文学者がためらわずオゴメクとするように、光広はためらわず自然に「オコメク」と認識するのである。保守的であろうがなかろうが、オゴメクという言葉を知らないのだから、ここで清濁の迷いが生じるはずはない。

繰り返す。光広は、濁点を打ち忘れたのではない。後世の国文学者によって濁点が補われるなどとも、露ほども思っていなかった。

それでは、なぜ、徒然草の本文は、本稿冒頭のようなテキストが通行するようになったのだろうか。そして、そこに源氏物語帚木巻のオコメク（あるいは架空のオゴメク）がどのように絡んだのだろうか。

五　古典注釈における語義注と文脈注

徒然草のテキスト史・注釈史の検討に入るまえに、明確にしておきたいことが、ひとつある。前稿の源氏注釈史の叙述にも、これはふかく係わっている。

それは、およそ古典文学作品を読み進めるうえで必要とされる注釈には、二つの異なったレベルの注があり、普通の注釈書ではそれが混在している、ということである。ひとつは被注語の語義を記述したもの、もうひとつは話の筋や文脈や登場人物の状況心理などを読み解いたもの、である。いま、仮に前者を「語義注」、後者を「文脈注」と呼ぶことにする。一つの注釈書に、この二つの異なったレベルの注が混在して

いても、注釈をたよりに読むにあたっては、普通、そのことは障害にならない。それどころか、混在していたほうが、おおむね注釈としてはプラスに作用する。であるから、注釈の利用者だけでなく注釈者本人も、それを混在と意識することが少ない。

この語義注と文脈注は、もともと明瞭に区別することのできるものである。が、時代をかさねると、その境界線が曖昧になってくる。読み手の時代に死語となったような古語においてはとくにそうであり、被注語と文脈注が固定化してしまうと、本来は文脈注だったものが語義注として機能することもある。

たとえば、源氏物語須磨巻に「枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに云々」という有名な一節があるが、作者が白氏文集の詩句を正確に理解して「枕をそばだてて」と表現したと見なして付す語義注は、「枕を～して」とならねばならない（戸川芳郎「「敧枕について」補論」『汲古』一四号）。これに「耳をすまして聞く」といったような注釈をすれば、それは文脈注ということになる。ところが、注釈者や読み手にとって「枕をそばだてる」という語句の具体性がうすれてくると、本来の語義がしだいに忘れられ、文脈注のほうが前面に出てきて、「枕をそばだてる」の語義が「耳をすまして聞く」であると錯覚されるようになる。本来は文脈注だったものが語義注として機能するとは、そういった事態をいう。

したがって、「をこづく」「をこめく」も、「烏滸（痴）」の意味に関連づけて記述すれば、それは語義注である。だが、それらを「得意がって」とか「ぴくつかせて」というふうに記述するのは、本来、文脈注に属する。つぎに、「お（を）ごめく」を語義未詳として、文脈から「ぴくつかせて」と説明したら、それは文脈注。だが、「うごめく」と音韻変化の関係にあるものとして「ぴくつかせて」とすれば、語義注ということになる。とはいっても、それが実在しなかったと判明した今となっては、古典語としての語義注はつけようがない。

六　『寿命院抄』と『野槌』

徒然草研究史に足跡をのこす最初の注釈書は、慶長九年の奥書と刊記をもつ『徒然草寿命院抄』（古活字本）である。本文はなく、注釈用の見出しと注釈文だけの本であり、それには、

ハナノホトオコメキテ　笑シキヲネンシタル心也　ハ、キ木ニ　ハナノワタリオコメキテカタリナス

とある。「笑シキヲネンシタル心也」は、中世の源氏注釈書『一葉抄』などを引き継いだものであり、おかしいのを我慢している様子だという注釈であろう。つまり、元来、これは、源氏帚木の「オコ（烏滸）ヅク」あるいは「オコ（烏滸）メク」の語注であった。そして、『徒然草寿命院抄』の右の注釈は、この著者も中世の源氏読解をそのまま踏襲していることを意味している。これを国語史のほうにスライドさせるならば、慶長九年において、源氏河内本の「をこめきて」も徒然草の「おこめきて」も、ともに「オコ（烏滸）メク」だったということになる。

清濁の区別に意をもちいた烏丸光広が『寿命院抄』とおなじ認識であったことは、繰り返すまでもない。この前後、光広校訂本に先行すると考えられる徒然草本文が、やはり活字本で出ている。濁点が使用されない版本であるため、版面からだけの清濁の判断はできないが、時代的には、光広らとおなじ認識だったろうと想像される。

そのおなじ認識をもつだろう同世代の学者の著作で、後世の徒然草注釈に影響をあたえたのが林羅山の『野槌』、全本文と頭注をそなえた最初の徒然草であった。刊年ははっきりしないが、元和七年（一六二一）の自序をもつ。問題箇所の注釈は、見出しもふくめれば、

鼻のほどおこめきて　源氏帚木に、はなのわたりおこめきてかたりなす　おかしきをねんじたる心也

注釈が『寿命院抄』の踏襲であることは明白。ただ、この注釈書の注目すべきは、この本が濁点を使用しているということ、そしてこの部分にかぎっていえば、本文が、

鼻のほとおごめきていふは

となっているということである。源氏物語・徒然草を通じて、また版本・写本を通じて、「お（を）ごめきて」という明確なテキストの嚆矢ということになる。ただ、版本『野槌』の清濁の区別は、全体に、厳密かつ精確とはいえず、羅山自身の認識がオゴメクであったかどうかは、留保しておくべきであろう。とくに「ほと」のほうに濁点のないことが気にかかる。濁点が本来あるべき文字の近接した前後に付されるといった間違いは、江戸期の版本によく見られる現象である。ちなみに、羅山自筆の清書本（内閣文庫現蔵）は、濁点を使用していないため、判断の手がかりにならない。

七　読み癖つき版本

『野槌』から二十数年後の正保二年（一六四五）に、テキストのみの本が、版元不明ながら、出版された。それを皮切

りに、慶安年間に入ると、徒然草の関係書の出版ラッシュとなる。

江戸時代初期、印刷技術の進歩によって古典文学のテキストとそれらの注釈書が続々と出版されたことは、周知の事実である。なかでも徒然草は、ほかの古典作品と比しても著しい。それらは、奥付刊年が違えば版を新たに起こしたものと見当をつけてもいいぐらいであり、たとえば注釈書『鉄槌』（青木宗胡著）なども、書肆間で版木が譲渡されるのではなく、そのつど版木をあたらしくしている。

正保二年　テキスト
【奥付】「正保二年　開板」

慶安元年　テキスト
【奥付】「慶安元年　二月日」（版元名を削ったか）

慶安元年　『鉄槌』（青木宗胡著）
【奥付】「慶安元戊子年仲冬良辰　藤井吉兵衛尉新刊」

慶安二年　『鉄槌』
【奥付】「慶安弐年暮春吉辰」

慶安五年　『なぐさみ草』（松永貞徳著）
【奥書】「慶安五壬辰暦孟夏廿六日長頭丸在判」

明暦三年　『鉄槌』
【奥付】「明暦三年二月吉辰　開板」

『鉄槌』も『なぐさみ草』も、注釈は、『寿命院抄』『野槌』の文言をそのまま踏襲する。ただ、これらはいずれも濁点を使用しない版本であるため、問題の「おこめきて」に関して、『野槌』の濁点をどのように理解し処理しているかは不明である。

羅山が『野槌』に序文を記した元和七年から数えて三七年の万治元年（一六五八）、ようやく濁点を使用した徒然草注釈書が出版された。

万治元年　『徒然草金槌』（西道智著、半紙本）
【奥付】「于時万治元戊戌歳初秋上旬」
【本文】鼻のほとおこめきていふは。
【注釈】鼻のほどおこめきて　箒木にはなのわたりおこめきてかたりなすといへり　おかしきをねんじたる心也

同年　『徒然草古今鈔』（大和田気求著）
【奥付】「万治元戊戌年　極月中旬　大和田九左衛門板行」

【本文】鼻のほとおごめきていふは
【頭注】はなのほとおこめきて　［鈔］源氏帚木
ニ鼻のわたりおこめきてかたりなす　おかしきをねんしたる意なり

いずれの注釈も『寿命院抄』『野槌』を引き継いでいるが、『徒然草古今鈔』のほうは本文までが『野槌』を踏襲する。

さきにわたしは、『野槌』の濁点が著者羅山の認識になかった可能性を暗示した。光広や羅山の念頭に「お（を）ごめく」なる古語が存在せず、『野槌』の濁点が不注意なもの、あるいは版本によくある間違いであるとするなら、『徒然草古今鈔』は冷静になって、それを訂正するはずである。しかし、『徒然草古今鈔』が無批判に先学の版本の字面を引き写したにしても、次節に掲げるテキスト・注釈書類からうかがえる濁点使用の状況は、「お（を）ごめく」という古語が、万治・寛文の交にすでに徒然草本文に定着していることを印象づける。とくに寛文元年の高階楊順『徒然草句解』の注釈「鼻をいからしていふ義成へし」は、本文「鼻の程。おごめきていふは。」を注記したものであり、「オコ（烏滸）メク」の文脈注ではなく、「オゴメク」の語義注を試みているとも見られよう。これが同七年『徒然草新註』（清水春流著）の「おごめきては鼻をうごかす義也」になると、「おごめく」＝「うごめく」の語学説を根拠にした語義注となっている。同年出版の北村季吟『徒然草文段抄』の言わんとするところは、『寿命院抄』も『野槌』も源氏帚木を「オゴメク」と解釈しているという解釈であり、春流の説が時代的に唐突な読解でないことを裏付けている。

以後、次節の年表で一目瞭然、徒然草においては、本文「オゴメク」、語義「蠢く」となって、『徒然草諸抄大成』の時代にはそれが完璧に定説として通用していたことがわかる。

八　徒然草「おこめきて」の清濁史年表

万治三年　テキスト（半紙本）
【奥付】「万治三庚子歳仲秋下旬　洛陽今出川林和泉掾板行」
【本文】鼻の程おごめきていふは

寛文元年　『徒然草抄』（加藤盤斎著）
【奥付】「寛文元年辛丑　霜月吉日　飯田忠兵衛開板」
【本文】鼻のほどおこめきていふは。

同年　『徒然草句解』（高階楊順著）

【奥付】「寛文元年辛丑十二月吉旦　洛二条通松屋町山屋治右衛門板行」
【本文】鼻の程。おごめきていふは。
【割注】は、木、に鼻のわたりおこめきてかたりなすと有　鼻をいからしていふ義成へし

寛文七年　テキスト
【奥付】「寛文七丁未暦二月吉日」
【本文】鼻のほどおこめきていふは。

同年　『徒然草新註』（清水春流著）
【奥付】「寛文七丁未秋吉辰執筆武藤西察　中野氏市右衛門尉開版」
【本文】なし
【注釈】おごめきては鼻をうごかす義也

同年　『徒然草文段抄』（北村季吟著）
【奥付】「寛文七年十二月吉日　飯田忠兵衛板行」
【本文】鼻のほどおこめきていふは
【注釈】鼻のほとおごめきて　寿抄并野槌云、源氏帚木にはなのわたりおごめきてかたりなす　おかしきをねんじたる心なり

寛文九年　『増補鉄槌』（山岡元隣著）
【奥付】「寛文己酉初夏日　山本長兵衛開板」
【本文】鼻のほどおごめきていふは。
【頭注】はなのほとおごめきて　源氏はゝきゝにはなのわたりおこめきてかたりなす　おかしきをねんしたるこゝろ也

同年　『徒然草諺解』（南部草寿著）
【奥付】「寛文九己酉年林鐘上旬　中村五郎右衛門開板」
【本文】鼻のほどをごめきていふは
【傍注】是ハ偽ト心ニ思フコトヲ顔ニアラハシテ云也（「鼻の云々」の傍）
蠢ノ字（「をごめきて」の傍）

寛文一〇年　テキスト（寛文七年版の覆刻）
【奥付】「寛文十庚戌暦二月吉日」
【本文】鼻のほどおこめきていふは。

寛文一二年　『徒然草よみくせつき』
【奥書】「従古徒然草之板行雖有之誤多故今又具改之令開板者也」
【奥付】「寛文十二暦九月吉辰　洛陽烏丸通四条上町山路氏家蔵」
【本文】はなのほどおごめきていふは、

延宝五年　『徒然草大全』（高田宗賢著）

【奥付】「延宝五年丁巳九月吉日　車屋町夷川角
林久次郎」
【本文】鼻のほどおこめきていふは
『徒然草参考』（恵空著）
延宝六年
【奥付】「延宝六年戊午初冬吉辰　西村七郎衛門
未正・同七郎兵衛正光開板」
【本文】鼻の程。おごめきていふは
【割注】是は偽と心に思ふ事を顔にあらはして云
也　をごめくは蠢（シュン）の字也　源氏はゝきゞに
はなのわたりおごめきてかたりなす　おか
しきをねんしたるこゝろ也
『徒然草直解』（岡西惟中著）
貞享三年
【奥付】「貞享三丙寅暦初秋吉旦　大坂心斎橋筋
書林平兵衛刊行」
【本文】鼻のほどおごめきていふは
【頭注】源氏帚木ニ　鼻のわたりおこめきてかた
りなす
【傍注】ウゴキテ也
テキスト
貞享五年
【奥付】「貞享五戊辰年三月中旬　薬師構蔵板」
【本文】鼻のほとおごめきて、いふは

同年
『徒然草諸抄大成』（浅香久敬著）
【奥付】「貞享五戊辰五月吉日板行　京書肆　武
村新兵衛・吉田四郎右衛門・谷口七左衛門・
田中庄兵衛」
【本文】鼻の程おごめきていふは。
【頭注】［鼻の程おこめき］源氏箒木ニ　鼻ノワ
タリヲコメキテ語リナス　オカシキヲネン
シタル心也〔寿〕
【側注】●鼻をうごかす義なり〔新注〕
●蠢（シュン）の字なり　是は偽と心に思ふ事を顔
にあらはしていふ心なり〔諺〕

九　オコメクからオゴメクへ

中世期において、河内本帚木巻の「をこめきて」は「オコ（烏滸）メク」であった。それをふまえた徒然草第七三段の「おこめきて」も「オコ（烏滸）メク」である。烏丸光広は、だから、清濁に迷うことなく、「こ」に濁点をうたなかった。注釈に河内本帚木巻を引用する同時代の『寿命院抄』も『野槌』も、この源氏異文を「オコ（烏滸）メク」と解釈していたはずである。

だが、前々節の最後に言ったように、そして前節の年表を通覧すれば明らかなように、寛文年間の高階楊順・清水春流らの注釈には、微妙に光広らの認識とのずれがあった。一七世紀後半の注釈者たちは、ひとむかし前の古典学者の認識を忘れたようである。季吟『徒然草文段抄』の注釈がそれをはっきり示しており、以後の徒然草は、本文が「おごめきて」、語義には「鰲」の漢字があてられて読解されるようになっていること、前節に見るとおりである。そして、かれらは、注釈に引用する源氏物語異文の「をこめきて」をも、そのように読解していた。

源氏物語本文がこのように読まれるに至るその淵源は、おそらく室町時代の源氏注釈『万水一露』にさかのぼれるであろう。そこでは、

はなのあたりをこつきてかたりなす

という見出しで、それを

鼻のうこく心也

と注釈していた。この「鼻のうこく心也」は、「はなのあたりをこつきて」を言ったものであるから、「をこ（烏滸）つきて」の語義注ではなく、文脈注であることは明らか。そして、かりに永閑が河内本「をこ（烏滸）めきて」を注釈したとしても、「鼻のうこく心也」とするはずである。どちらの本文の注釈であっても、『万水一露』の右の一文は、あくまでも、注釈者永閑が、物語の登場人物の動作あるいは表情を想像してほどこしたことになる。

本来、「をこ（烏滸）つきて」の文脈注だった「鼻のうこく心也」が「をこ（烏滸）めきて」の文脈注としても使われ、ウゴク→ウゴメクから「オコメク」→「オゴメク」というふうに連想されたと考えられる。前稿でも触れた、『続源語類字抄』の「おかしき時は鼻をこめく也」、『首書源氏物語』の「我もおかしくて鼻おこめく也」などは、多分にそういったことを感じさせる注釈文といえよう。

注釈史のうえで、この帚木巻と徒然草との関係が指摘されるのは、『徒然草寿命院抄』が最初であった。以後、徒然草と帚木巻異文とは、セットになって、とくに徒然草注釈においては常套句として繰り返される。『寿命院抄』に『万水一露』の一文の影響があったかどうかは不明である。だが、承応（一六五二～五六）以前すでに帚木巻「をこめく」が堂上の源氏講釈では「オゴメク」と読まれていた（『源氏清濁』）。このことは、前稿で指摘したところである。それを考えれば、帚木巻「オゴメク」とセットになっている徒然草の「おこめきて」に、やがて「おごめきて」と濁点がうたれるようになっただろう、と想像するのは容易である。いささかの曖昧さを

感じさせるとはいえ、『野槌』に濁点が付されていることも、著者羅山の真意とは関係なく、強力な後押しになったであろう。

一〇　源氏のオゴメク、徒然のオゴメク

『野槌』以後『徒然草古今鈔』までの三七年間、徒然草関係の出版物はいくつかあったが、清濁を区別した徒然草のテキストあるいは注釈書は刊行されなかった。その間、いま言ったように、帚木巻の「をこめきて」は濁音で読まれるようになっていた。したがって、注釈でつねに帚木巻を引き合いにだす徒然草の「おこめきて」も濁って読まれたはずである。『徒然草古今鈔』は『野槌』の影響というか、この部分にかぎっていえば、『野槌』の引き写しであるが、かりに羅山の頭に「オゴメク」という語が存在しなかったとしても（したとかしなかったとかに係わらず）、『徒然草古今鈔』の著者の頭のなかには、この語が存在した。

その二年後、万治三年の林和泉掾版のテキスト（半紙本）が「オゴメク」の本文を採用する。以後、清濁を区別するテキスト・注釈書において、問題箇所に濁点が付される傾向が見られるようになり、寛文七年に北村季吟『徒然草文段抄』が刊行される。ここでの季吟の認識が、定説となっていた「オゴメク」であることは、いうまでもない。語義も、「蠢」の漢字が当てられていたであろう。こうしてその六年後の延宝元年、おなじ季吟の手になる源氏注釈『湖月抄』の出番となる。その本文は当然、

はなのわたりおごめきてかたりなす。

である。そして、それに傍注して、

おかしきを念したるさま也

とのみあるこの一文は、中世の源氏注釈（『一葉抄』など）を引いたというより、そのころすでに徒然草注釈で常套句化していたもの、みずからの徒然草注釈を直接つかった、といったほうが正確であろう。

時間は前後するが、当時の古典学者にとって次なる問題は、このオゴメクをどう現代語訳するかであった。近世の古学者は、この部分を処理するにあたって、一条兼良・寿命院・烏丸光広らとは異なった環境にあった。兼良・寿命院・光広らには、「烏滸」を語幹とするオコメクという語しかなく、それはほぼ日常言語の範疇にあったか、さほどの古さを感じさせない言葉だった。すなわち、あえて語義注を付す必要がなかった。それに対して、万治・寛文のころの古典学者は、語形をオゴメクと認識した。そう認識したからには、かれらの

観念のなかでは死語となった（客観的にいえば、存在しなかった）古典語オゴメクを現代語に置き換えなければならない。

それを試みた最初は、寛文元年『徒然草句解』の「鼻をいからしていふ」であった。ただ、この現代語訳は、オゴメクとイカラスとの語感がしっくりしなかったのだろうか、以後の注釈ではほとんど無視された。

そのつぎに、清水春流『徒然草新註』が「鼻をうごかす」と現代語訳した。おそらく、『万水一露』の一文が注釈者の頭か視界をよぎったのであろう。何度も言うように、もともとこれは「オコヅキテ」の文脈注である。だがしかし、それを受けて、『徒然草諺解』がオゴメクに「蠢」（うごめく・しゅん）の漢字をあてた。これでもって現代語訳すると、文脈のうえでもすこぶる自然になった。さらに、オゴメク・ウゴメクがいわゆる五音相通で説明でき、理論的根拠があたえられた。相通という語学上の裏づけは、「うごめかせて、ぴくつかせて」を源氏でも徒然でも、「オゴメキテ」の語義注にさせるに十分であった。古学者にとっては、抵抗なく受け容れられた語学説であり解釈であったと考えられる。

かくして、オゴメクは「うごめく」であるという理解、というか誤解が定着した。この誤解によって、源氏物語河内本と徒然草を典拠にした「お（を）ごめく」が、古典語として古学者のあいだで認定され、近世古学の国語学を継承した近代の古語辞典に登録されているのである（前稿第八節図版参照）。オゴメクという、存在しなかった古典語の存在感がきわめて大きかったことは、すでに前々稿で述べた。

〔付記〕第八節に掲げた徒然草テキスト・注釈書は、とりあえず『諸抄大成』までの濁点使用のもののみ。なお、国文学研究資料館の徒然草版本コレクションのお世話になった。

（しらいし　よしお・文部科学省主任教科書調査官）